

たった半日でも、1人からでもいい。「大切にされた」「愛された」と思って旅立ってほしい。こんな願いで東京・山谷地域(荒川区、台東区)で運営している在宅ホスピス「きぼうのいえ」があります。

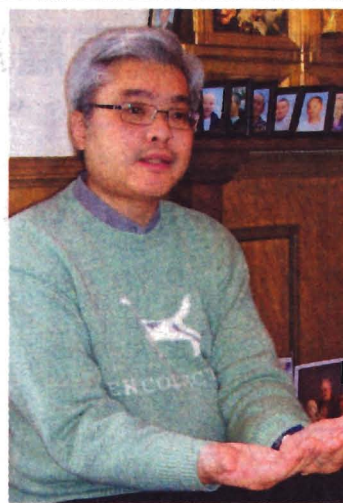
ホスピスは末期がん患者などを対象に、延命処置を行わず、身体的苦痛をやわらげ、精神的援助をして生活をまっとうできるように医療を行う施設です。

山谷地域は、1人3畳ほ

うのいえは、行き場をなくしたホームレスや家族と縁のうすい人をみとる日本で唯一の施設です。

真ん中に開所した「きぼうのいえ」は、行き場をなくしたホームレスや家族と縁のうすい人をみとる日本で唯一の施設です。

望 希



施設長の山本雅基さん。屋上の礼拝堂には遺影が並べられています

真っ黒の人生を白に

「3時のお茶は飲みましたか」と入居者に声をかける「きぼうのいえ」職員の高村有希さん



した。

50歳のとき、がんで亡くなった入所者S男さんは、20代から路上生活者となりました。

S男さんは、10代のとき、父親が母親を刺殺する現場を目撃。そのショックで心に病気をかかえることになった。麻薬やアルコール漬けになっていたS男さんには、どんな痛み止めも効きませんでした。

全身で助けを求めるS男さんの看護に、スタッフは一睡もできない日々をすごしました。

S男さんは入所して3か月後になくなりました。

「大丈夫。力をぬいていいんだよ」。夜勤で見回りをしていた高村有希さん

(30)が手をにぎり、語りかける中、S男さんは静かに息を引き取りました。

「私たちができることは本当に小さいことなんです。病気で苦しいときも、裏切られても、生きている間はすべての瞬間が喜びだと学びました」と高村さんは話します。

「きぼうのいえ」は、公開の映画「おとうと」(山

田洋次監督)で弟・鉄郎が入居するホスピスのモデルになりました。

「映画のように親族が来ることはまれです。でも、スタッフが肉親と同じようにみとります。長野県に墓もつくりました」と施設長の山本雅基さん(46)は話します。

山本さんが山谷地域で活動を始めたのは、ノイベル平和賞を受賞したカトリック教会の修道女マザーテレサの言葉を聞いたことがきっかけでした。

それは1981年、来日したマザーテレサが山谷地域に来たとき、「日本には、貧しい人をほったらかしにしている貧しさがある」と語った言葉です。

マザーテレサがインドのカルカッタに設立した「死を待つ人の家」を日本につくりたいと不動産屋を駆け回りました。しかし、300件以上断られ続けました。

で妻の美恵さん(50)の蓄えを担保にするなどして資金をかき集めて土地を買い、建物を建てました。

経営は火の車です。毎年1000万円を超える赤字は、市民や教会からの寄付でまかさないです。

「きぼうのいえ」の入居者に伝えたいことは「人は信頼に値する」ということだと話す山本さん。「刑務所に20年入っていた人が『真っ黒だった人生を真っ白にしたい』と話すんです。ここは人生と和解する場所です」

06年には、訪問介護を行うヘルパーステーションも開設。「きぼうのいえ」の精神は山谷中に広がっています。「山谷を憎しみの街から聖なる街に変えたい」。山本さんとスタッフの挑戦は続きます。

(染矢ゆう子)

ドヤ街のホスピス

「お金を借りるなら、100万も一億も一緒だよ」。地元山谷の不動産屋の助言

シリーズ「希望」は日本各地で希望の星として活躍する人々を紹介していきます。題字は書家の金澤翔子さんの作品です。